

trivia ■ 皮膚科のトリビア ■ 174

本欄は、小誌編集委員の浅井先生が学会・研究会などで見聞きした「皮膚科のトリビア」をその都度まとめ、連載しています。ご意見等ございましたら、ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

SGLT2阻害薬による爪囲炎

第48回日本皮膚免疫アレルギー学会から(平成30年11月17日)

70歳代の女性、20年前から糖尿病があり、2カ月前からSGLT2阻害薬のトホグリフロジンを開始。その1カ月後から両手の後爪廓に鱗屑を伴う紅斑と腫脹が出現。爪甲のdystrophyを伴った。KOH検鏡でカンジダなし、足趾には病変なし。病理組織では軽度の錯角化と表皮の肥厚があり乾癬型の反応。被疑薬の中止後、徐々に皮膚症状は改善した。

「尿糖の排泄増加作用という薬理学的機序とは関連がなさそうで、乾癬型薬疹としてよいのではないかと思った。ちなみにSGLT2阻害薬の薬疹はまれではなく、発売1カ月後の2014年に日本糖尿病学会から注意喚起があったとのこと。知らなかった」。

VZVによるStevens-Johnson症候群

第48回日本皮膚免疫アレルギー学会から(平成30年11月17日)

20歳代の男性、口腔内びらん、眼症状を伴う体幹・四肢の滲出性紅斑を繰り返している。病理組織では表皮の個細胞壊死が目立つ。単純ヘルペスウイルス(HSV)によるStevens-Johnson症候群(SJS)を考え、アシクロビルとステロイドの全身投与が行われたがステロイド減量によって再燃。胸部の

水疱と口腔内びらんから、水痘・帯状疱疹ウイルス(VZV) DNAが検出され、VZVによるSJSと診断した。治療にはシクロスポリン内服を要した。

「HSVによる多形滲出性紅斑は経験があるが、VZVが原因だった例はこれまで経験がない。今後は軽症の紅斑症でもVZVの抗体価変動を確認することにしよう」。

むずむず脚のパッチ薬による脱色素斑

第48回日本皮膚免疫アレルギー学会から(平成30年11月17日)

ロチゴチンパッチ(ニュープロ®)をむずむず脚症候群に対して使用中の50歳代女性。使用開始1年後に貼付部位に痒みと発赤を生じるようになり、ステロイド軟膏の外用で治療していた。さらに1年後、貼付部位である両肩に脱色素斑が複数生じているのに気づいた。病理組織では表皮基底層の空胞変性と真皮の細胞浸潤があり、MelanA陽性細胞は消失しており、ロチゴチンパッチによる脱色素斑と診断した。ロチゴチンパッチはドパミンアゴニストの経皮吸収剤であることから、チロシンキナーゼ阻害やメラノサイトに対する直接的な細胞障害が関与している可能性がある。

「接触皮膚炎も生じていることから、炎症後の色素脱失なのかもしれないが、薬理作用で生じているかもしれない。むずむず脚症候群のほかにパーキンソン病にも使用さ

トリビア (trivia) = 3を意味するtriと十道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにもある場所」。そこから転じて「瑣末なこと」となり、今では雑学的知識、豆知識、などを意味する言葉として定着している。

浅井俊弥

Asai, Toshiya

浅井皮膚科クリニック

(〒240-0013 横浜市保土ヶ谷区帷子町1-14)

ホームページアドレス:

<http://www.asai-hifuka.com>

れているらしい。そういう薬剤があるとは知らなかった。興味深い症例だった」。

神経根症による限局性筋炎

第48回日本皮膚免疫アレルギー学会から (平成30年11月17日)

30歳代男性、左下腿の疼痛と腫大が持続するため受診。CPKは正常だったが、アルドラーゼが6.7 U/lと軽度上昇。造影MRIではヒラメ筋と三頭筋に高信号あり。ただし三頭筋の筋電図では神経原性の変化であった。腰椎椎間板ヘルニアがあり、S1神経根症に起因する限局性筋炎と診断した。皮膚筋炎/多発性筋炎の鑑別疾患として知っておくべき疾患である。

「筋電図で神経原性の変化があることが鑑別として重要。治療はステロイド内服が必要な場合もあるが、椎間板ヘルニアなどの神経根症の治療を優先することになる。初めて知った疾患だった」。

妊娠中に生じるSweet病は顔面に多い

第48回日本皮膚免疫アレルギー学会から (平成30年11月17日)

30歳代の女性。4年前に妊娠11週のときに熱発を伴う頭頸部の紅斑が生じ、Sweet病と診断されステロイド内服による治療を受けた。その後は再燃なく経過していたが、3年後の第2子妊娠の際にも、妊娠11週で顔

面に紅斑が生じた。プレドニゾロン20 mg/日の内服を開始し、直後から紅斑は消褪。その後妊娠中、出産後も再燃はない。妊娠に伴うSweet病は初期から中期にかけて発症し、顔面など頭頸部に限局していることが多い。

「経験はないが、こういった機序によるものなのだろう。妊娠は病気ではないが正常な状態でもないということか」。

チタンアレルギーはまれではない

第48回日本皮膚免疫アレルギー学会から (平成30年11月17日)

チタン試薬のパッチテスト結果の報告。某歯科大学金属アレルギー外来を受診したチタンアレルギーが疑われた344名(男性74名・女性270名)のうち、なんらかの金属に陽性だったのは256名(74.4%)で、そのうちチタン試薬では24名(7.0%)が陽性だった。チタンに陽性だったのは歯科用インプラント治療後の患者に多かった。チタンも必ずしも安全な金属ではない。

「パッチテストに用いた試薬が何かはわからなかった。歯科の文献では2%硫酸チタン溶液(林純薬工業)、1%塩化チタン溶液(和光純薬工業)の記載がある。現在皮膚科ではSmart Practice CANADAのtitanium (iv) oxide, 0.1%, petとtitanium, 1%, petが入手可能であるとのこと」。